追悼・塩谷千賀子先生を偲んで

塩谷先生、有難うございました

馬場直子
神奈川県立こども医療センター

塩谷先生に初めてお会いしたのは、今から15年ほど前、私が横浜市大から非常勤として週１回、斎藤胤廣部長の頃のこども医療センターに来ていた頃だった。塩谷先生が紹介して来られたDown症の患児で、蛇行性穿孔性弾性線維症と診断した症例があり、比較的珍しいので、小児皮膚科学会で発表しようということになった。そこで、斎藤先生、塩谷先生、私の３人で症例について検討するために、塩谷先生にわざわざこども医療センターまでお越し頂いた。今、毎日私が外来診療をしているこの机を囲んで、初めて塩谷先生とお話ししたことが、つい昨日のことのように思い出される。とてもおきれいな、素敵な先生で、患者さん思いのお優しい方だということが、お話の中からすぐに伝わってきた。先生のご近所に住む、Down症の当時18歳になった患児のことを、小さい頃からよくご存知で、何かとお心に掛けていらしたようで、３年前からトリコチロマニアがあり、最近父親が亡くなられ、その直後に爪の自損症とともに、全身の掻破が始まり、遂に線状掻破跡様の本症皮疹が出現したという経過が、先生のご説明でよくわかった。いつも心を込めて、丁寧に患者さんを診ていらっしゃる本物の臨床医という気がして、頭が下がる思いだった。私は、いっぺんに塩谷先生のファンになってしまった。「この症例は、塩谷先生が最初にご覧になり、紹介して下さったのだから、是非塩谷先生が発表されては」と、斎藤先生が勧められたのだが、「いえいえ、私のようにもう何年も学会発表からご無沙汰していると、声が震えるので、こちらで診断をつけて頂いたことだし、是非馬場先生に」と私にお鉢が回ってきてしまった。その年の小児皮膚科学会で、「Down症に併発した蛇行性穿孔性弾性線維症」という題名で発表させて頂いた（臨床皮膚科47:1227,1993）が、塩谷先生も共同演者としてわざわざ当日学会に足を運んで下さって、とても嬉しかった。その上、後で「とてもいい発表でした。やっぱり私がやらないで、馬場先生に発表してもらって本当によかった」と、優しいお手紙まで頂戴して感激した。それに、先生の字がまた素敵で、本当に優雅な女性らしい美しい字を書かれる方だと思った。今でも、そのお手紙は大切に、私の机の引き出しにしまってある。

その後は、ときどき患者さんをご紹介頂くお手紙のやり取り、学会場でご挨拶する程度だったが、ある時先生からお電話を頂いた。かまくら春秋社で作っている「皮フの手帖」という患者向けの季刊誌の原稿依頼と、今後一緒に編集委員になってくれないかというご依頼だった。その頃、私は斎藤先生の後を継いで初めての１人医長となり、その上まさかの３人目を産んだばかりで、公私共に目の回るような忙しさ、とてもそんなことを引き受ける余裕のない生活を送っていた。普通なら考える余地もなくお断りするところだったが、敬愛する塩谷先生のご依頼とあらば、たとえどんなに無理をしてでもお引き受けしなければという気持ちが打ち勝って、無謀にも「はい、喜んで」と言ってしまった。

そういうわけで、３ヶ月に１度、かまくら春秋社の一室で、恐れ多くも西山茂夫先生、原紀道先生、塩谷先生という尊敬する大先輩の先生方の中に、私が加えて頂くこととなり、そのメンバー４人で次号のテーマや原稿の分担、どなたに原稿依頼するかなどについて話し合った。その編集会議でのひとときは、学閥や年齢を越えて、ざっくばらんでアットホームな雰囲気で、とても楽しかった。ゆとりのない毎日を送っていた私にとってかけがえのない楽しみな時間となった。特に、西山先生、原先生、塩谷先生はお住まいが鎌倉で、なんだかご近所のお友達同士といった雰囲気で、色々なプライベートなお話も飛び出しておもしろかった。塩谷先生は、お母様の

ご看病をされていらした頃は、とても大変そうだった。でも、そんなお話をされる時も、いつも明るく朗らかにおっしゃっていたが、大勢の患者さんを診て、お嬢様２人と病気のお母様のお世話まで全部お１人でなさっているのかと思うと、本当に見習うべきスーパーウーマンだと感じた。お母様を看取られてからの先生は、ダンスをされたり、色々と旅行を楽しまれたり、医師会や神奈川県皮膚科医会で活躍されたりと、ますます若々しく溌剌とされて、本当にいつお会いしても素敵な先生だなあと憧れる気持ちが一層強くなった。

ところが、ある時思いもかけず、「この間大腸がんが見つかって、急遽入院して手術してもらって、３日前に退院したばかりなのよねえ」と、こともなげにおっしゃるので、本当に驚いた。「まだ何でも食べられないのがちょっと辛いけど、それももう少しの辛抱」と、明るくおっしゃるので、「早く見つかって本当によかったですね」などと私は言っていた。でも、その数ヵ月後、「今度は肝臓に転移が見つかって、この間ちょっと入院して部分切除してきたの」と、さも簡単そうにおっしゃるので、またまたびっくりしてしまった。本当に、明るく朗らかにくったくなくおっしゃって、ご自分で「根が楽天的にできているので」と。もし、私だったらきっと暗く落ち込んでしまって、こんな風に人に話せないに違いないと思った。そして、編集会議にもほとんど欠席されることもなく、いつも出てきてくださった。「皮フの手帖」20号の中で、味のカルテ、わが街うまい店のコーナーで、横須賀市衣笠にある「葉むら」という天ぷらやさんを塩谷先生が紹介されるということになり、編集委員の４人でそのお店に繰り出した。左下の写真は、その時のスナップ。先生方は、皆お酒が入って饒舌となり、ますます色々な話に花が咲いて盛り上がったが、一瞬神妙な雰囲気になったことがあった。それは、それぞれに子供の話になった時に、塩谷先生が「私は最初の子供を保育園に預けて今でいう乳児突然死症候群で亡くしているんですよ」と、目を潤ませながらおっしゃって、それを聞かれた西山先生が、「それはどんなに辛かったでしょう」と急にポロリと涙をこぼされた。私も、胸がキューンとなってなんと言っていいか、言葉を失ってしまった。いつも、朗らかで太陽のように明るい先生だけど、そんなに辛いご経験もあったんだなあと、改めて塩谷先生の奥深さを感じた思いだった。

この葉むらでの会食の数ヵ月後、突然スポンサーの都合で、残念ながら「皮フの手帖」は廃刊となってしまい、もうこの楽しみな鎌倉での編集会議もなくなってしまった。私にとっては、３ヶ月に１度の心と脳への栄養のひとときだったので、とても残念でならなかった。そして、定期的に塩谷先生にお会いする機会を失ってしまい寂しい限りだった。

その後は、時々患者さんの紹介のお返事に、「塩谷先生、お具合はいかがですか？」と尋ねたりすると「何とかやっています」といつも丁寧なご返事を頂いて、ほっとするということの繰り返しだった。

先生がお亡くなりになる前の最後のお手紙では、とても丁寧なアトピー性皮膚炎の患者さんのこれまでの経過説明の後に、「最近お会いする機会がなく残念ですが、『神皮』拝見いたしましてお元気なご様子嬉しかったです。私の方はまた来月あたりopeする予定です。でもお蔭様で毎日診療させて頂いております。またいつか、お会いする時を楽しみにしています」と、お忙しい診療の合間でしょうに、書き加えて下った。

山崎皮膚科医院の看護師さんからも、「ご自分がどんなにお辛い時でも、いつも笑顔を絶やさず、患者さんを第一に思われる、本当に思いやりのある先生でした」と伺いました。

お通夜の席で、塩谷先生によく似ていらっしゃる、とてもおきれいなお嬢様お二人が肩を寄せ合って泣きながらも懸命に、喪主を務めていらっしゃるけなげな姿と、塩谷先生の素敵な笑顔のお写真を拝見し

て、私も涙が止まりませんでした。

今度は「神皮」の編集会議でご一緒させて頂けると、楽しみにしていたのに、塩谷先生、こんなに早く逝ってしまわれるなんて・・・。本当に、残念で、寂しくてなりません。ご近所で仲のよかった原先生と、今ごろは天国で再会されて、ワインでも酌み交わしていらっしゃるのでしょうか。塩谷先生、本当に色々とお世話になりました。塩谷先生の誰に対してもお優しく、何事にも丁寧で、女性らしいお心配りのできる素敵な生き方に、とても憧れ、目標としてきました。これからも皮膚科医として、母として、１人の人間として塩谷先生のことをお手本に、目指していきたいと思います。塩谷先生、本当に有難うございました。先生のこと、一生忘れません。

塩谷千賀子先生

西山茂夫

鎌倉には「やつ」が多い。元来は小さな山に挟まれた低い湿地帯の事で、今は狭い路地が入りくんで、家が建っている。「やと」（谷）ともいう。癌が肺に転移し、咳がひどい状態での、この地の往診は辛かったに違いない。リンコデを使いながら、“セキが止まってくれたら言うことなしの状態です”（2003年８月26日）と通院可能な抗癌剤療法に替えてから１年、2004年８月13日に亡くなる直前まで、笑顔で診療を続けられた。

世の中は実に面白くない、という感情を仏頂面一ぱいに表して歩いている女が多い鎌倉の中で、不治の病を患者に気付かせることなく、明るい微笑を浮かべた塩谷さんの顔は美しく輝いていた。「とても可哀そうで見ていられない」と、先代の山崎孝先生の頃から医院で仕事をし、塩谷さんを子供の頃から知っている看護師さんの松本エミ子さんが涙していた。

塩谷千賀子さんと親しく知り合ったのは、「皮フの手帖」という患者啓蒙用の小雑誌の編集を共にした時からである。故・原紀道、塩谷千賀子先生が編集され、青柳俊（北海道）、北村公一（大阪）、久保容二郎（長崎）の各先生が定期的に執筆され、後に馬場直子先生が加わって、皮膚科医の間でも評判が良かった。

塩谷さんは診療が長引いて、遅れることもあったが、年４回の編集会議に喜んで出席された。ずい分と無理な執筆のお願いをしたこともあったが、“最近系統立って専門書を読むことが無かったのですが、このところ学生気分となっています。実際に診療していて初めて思いあたることなどもあり、これも編集委員となった役得でしょうか”（1997年、春）と云っておられた。

編集会議が終ってから、好んで酒を嗜まれた塩谷さんを飲みに誘っても、いつも断られた。お母様の看護があったからである。馬場直子さんには子供がいるからと遠慮され、仕方なく、原紀道さんと男だけ２人で飲みに行ったものである。

「皮フの手帖」の編集後記から塩谷さんの書かれた文をいくつか抜粋する。

“例年より長く楽しませてくれた桜でしたが、それでも見事な咲きっぷりをみせるのは１年のうち、ほんの２、３日。それを思えば、人間は気持１つで華でいられる期間は長いものだと思います”（1996年、夏）。

“最近往診が増えました。診療室でみると通り一遍のことが、何故か医者本来の姿に戻るような気がします。往診しながら気が休まるというのも変なものですが、お互いありのままを診るということなのでしょうか”（1998年、秋）。

“近くの広い駐車場がアスファルトに変貌しつつある。間もなく顔を出す幼虫はセミに変わることなく死んでいく筈だ。雑草やぬかるみが不愉快なのは分るが、そんな勝手で小さな自然がどんどん壊されていく。セミも随分と減ってしまった”（2000年、秋）。

“いよいよ21世紀。100年前には考えられなかった治療が可能になっています。はたして今世紀にはどんな病気が克服されるのでしょう。でもどこかで人間にはこれ以上してはならないことがあるような気がします”（2001年、春）。

“芝生のあちこちに紫色のスミレが顔を覗かせています。昨年友人に分けてもらって植えたことを思い出しました。こちらが忘れていたのに、自然というのは律儀に季節の届けものを持って訪ねてくれます”（2001年、夏）。

短い文章の中に、自分の病の進行を知りながらも人間と、自然へのやさしい思いが溢れ出ており、忘れることが出来ない。

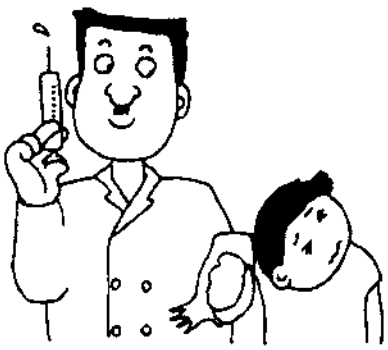
山崎皮膚科を継いでの診療、育児、長期間の看護、そして最後に自分の不治の病と、見方によれば、苦難の連続であったかも知れない。しかし、多数の患者に慕われ、立派に成長された２人の素晴らしい娘さんに囲まれ、そして何よりも、皮膚科の診療が好きであったことを思えば、充実した生を生きられたと信ずる。

塩谷千賀子さん、もうじき、貴方に似たお孫さんを見ることが出来ますよ。

Information

原稿募集

随筆　写真　絵　イラスト　何でも歓迎いたします。



以下の様な仮の題にても原稿をお待ちしています。

A）お宝拝見　→　秘蔵の一品
B）秘伝&私の工夫etc.
C）うまくならないGolfの話
D）患者さんに教わったこと
E）教授こぼれ話
F）私の近くのこんな店

等です。どしどしお寄せ下さい。原稿は原稿用紙数枚分（最長10枚）。
ワープロで書かれた方は、フロッピーも送ってください。
顔写真（スナップでも構いません）もお願いします。

宛て先
〒234-8503 横浜市港南区港南台3-2-10　TEL 045(832)1111
済生会横浜市南部病院　木花　光　FAX 045(831)0833